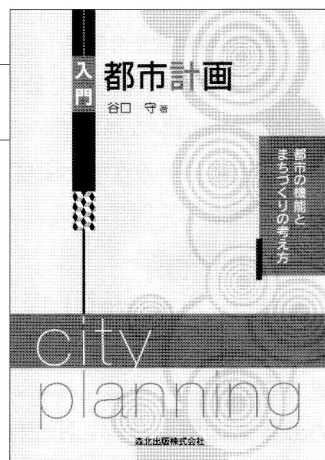


谷口 守=著

# 入門 都市計画 —都市の機能とまちづくりの考え方—

2014年10月発行  
本体2,200円＋税  
森北出版株式会社  
ISBN 978-4-627-45261-9



森本章倫  
MORIMOTO, Akinori

早稲田大学創造理工学部社会環境工学科教授

我が国は人口減少社会に突入して、新たな都市問題が指摘されている。例えば、地球環境負荷を低減させるための都市のあり方や、少子高齢化社会に対応した街づくり、あるいは大規模災害を想定した強靱な国土形成などである。いずれも20世紀にも指摘されていた問題であるが、今世紀に入り、その対応は都市計画の喫緊の課題となっている。一方で、高度経済成長期に生じた様々な都市問題の解消を主眼とした従来の都市計画の教科書では、新たに顕在化した問題に対して、十分な解を見出すことは難しい。本書は、まさに都市計画の過渡期に出された「次世代の都市計画」の教科書である。

本書では、まず「なぜ都市ができるのか」を解説することから始めている。様々な活動が都市に集まることで発生するメリットを説明し、時間軸の中で都市が形成されるメカニズムを説いている。2章は我が国の都市化の経緯とその問題について説明している。特に、無秩序な市街化（スプロール）が今後の社会資本整備の維持管理に大きな問題を与えることを指摘している。3章、4章では、古代からの計画行為とその意図の歴史を振り返りながら、計画にまつわる規範と柔軟性について初学でもわかりやすい平易な言葉で説明している。5章、6章では都市施設の機能や配置など、都市計画の主要課題へと展開し、豊かな都市空間を創造するための、地域の歴史や風土の重要性や、都市デザインや景観計画について言及している。7章では「持続可能性に取り組む」として、温暖化ガスの増加、緑地の減少、人口上限など地球規模で考える際の、概念や指標などが紹介されている。8章でようやく「都市計画の基本的な制度」が登場する。我が国の都市計画制度の基本である、規制、誘導、事業の3本柱による全体構成が簡潔に紹介されている。なお本書では制度論の説明は最小限にとどめ、参考文献に良書を紹介しているので、詳しく知りたい方は一読をお

勧めする。9章では実在する都市を更新するための具体的な方法や実態について解説している。特に章の後半では、人口減少時代の都市再構築のヒントが述べられているのが興味深い。続く10章では未来の都市計画に向けて、「新しい都市の形を考える」と題した著者の考えが随所に散りばめられ、コンパクトシティ、スマートシティをはじめ、著者の先見的な視点が書かれているのは注目に値する。11章では「合意と担い手」として、これまで述べてきた都市計画を実践する際の重要な内容が説明されている。12章は「これからの都市づくり」として、著者が本書に込めた思いが語られている。プランナーが従来のルールや制度だけでルーチンワークのように街を作ることを、思考停止と批判し、多少のリスクを受け入れる発想がなければ良い都市はできないと明言している。

著者自身も本書の特徴について触れているが、読み終えた感想は「都市計画における発想の自由」である。初学の学生に都市計画の法律や制度を教えて、既存の枠にはめるのではなく、「なぜ都市が存在し、どうすれば変わるか」を自ら考えさせて、柔軟な思考の形成を促している。

私自身は30年にわたり都市計画の研究と実務に携わってきたが、「都市計画には始まりもなければ終わりもない」と痛感している。時代に合わせて都市は成長し、持続し、ときには衰退と再生を繰り返す。その中でプランナーは、過去から積み重ねてきた都市の多様な資源を上手に活用しつつ、その時代の人々の声をよく聞き、次世代のニーズに適応した都市へと進化するお手伝いをする。都市における時代の上手なつなぎ役が都市計画であると思う。そういった意味でも本書はこの都市計画の基本を思い出させてくれた良書である。初学の方だけでなく実務者にとっても、必ず明日の都市計画を考えるきっかけになるはずである。